

イギリスにおけるカップルダンスの標準化

井上 淳生

はじめに

本稿の目的は、一対の男女が身体を接触させる形式の舞踊（カップルダンス）が、イギリスにおいていかなる経緯で標準化されてきたのかを跡付けることである。現在、カップルダンスは、「社交ダンス」や「ボールルームダンス」、「ラテン・アメリカンダンス」、「ダンススポーツ」等、様々な名称で呼ばれている。

日本で「社交ダンス」と呼ばれている男女2人1組の舞踊は、20世紀初頭のイギリスに起源を持つ。当時、ヨーロッパおよび南北アメリカ大陸にルーツを持ついくつかの踊りがイギリスで標準化され、世界に「輸出」されている。ここで言う標準化（standardization）とは、各踊り手の「センス」を前提とした「自由で気楽な踊り」から即興性を排し、マニュアルに基づいて訓練を積むことによって、誰もが踊れるようになることを目指した、カップルダンスに対する一連の操作を指す。日本は世界に先駆けてイギリスで標準化されたカップルダンスを取り入れている。大きな特徴は、「教科書」として細密に規定された技術体系と、それを基礎にした競技会や発表会という提示形式である。

現在、日本の社交ダンスは、イギリスにおける標準化を経て、上演作品的な踊り方が主流になっている。本稿では、現在の日本の社交ダンスの源流となったイギリスに注目し、当地におけるカップルダンスの標準化の過程を振り返りたい。

1. 標準化の前史

1-1. 男女2人1組という形式

19世紀以前のイギリスでは、「アッセンブリールーム（assembly

room)』と呼ばれる上流階級向けの舞踏室においてダンスが踊られていた。主に湯治場と結びついたこの施設は、18世紀にはロンドン市内のハムステッドやエプソムのほか、郊外のタンブリッジやバースなどの保養地に建てられていた。なかでもバース¹は最も有名であり、他のアッセンブリールームのモデルとなった (Richardson 1960 : 20)。

バースは18世紀の初期にはすでに、湯治客や観光客が訪れる小都市であったが、下水道が整備されておらず悪臭が漂い、賭博があらゆる社会階層にまで浸透するなど、衛生や治安の面での問題が山積していた。そのような状況下で、バースを温泉保養施設を中心とした観光都市に作り替えるように改革したのが、当時、典礼を司る立場に抜擢されたりチャード・ナッシュであった。アッセンブリールームもナッシュによる発案である (小林 1989:42-60)。ナッシュは、上流階級向けに舞踏会 (ball) を開催している。開催は毎週2回、夜6時から11時までと厳格に規定し、秩序の維持が重視された。

ナッシュによる舞踏会は、その場で最も身分の高い2人によるメヌエットから始まり、次いで、他の男性は各自2人の女性を誘って踊り始めることと決められていた。メヌエットはたいていの場合、2時間は続いたという。開始から2時間ほど経った後に、カントリーダンス (country dance) に切り替わる。この踊りは男女が輪になって集団で踊るものであるが、男女のペアを基本とし、パートナーチェンジを行いながら最終的にはその場にいる異性全員と踊ることになっていた。これが1時間ほど続いた後に、休憩を兼ねたティータイムになる。その後、再びカントリーダンスを開始し、11時の閉会に至る、というのがナッシュの主導した舞踏会の流れであった (Richardson 1960 : 22-23)。

18世紀のイギリスでいう男女2人1組とは、「オープンカップル」という身体の接触が少なく、パートナーチェンジが頻繁に行われるような形態を指していた。それが19世紀に入る頃、現在のように一対の男女が向かい合い、踊りの種類によっては半身を密着させるという「クローズドカップ

ル」の形態が登場したという（同上：19）。

19世紀に活躍した舞踊研究家のトーマス・ウィルソンの『ワルツ』（1816年）によると、1812年には今日のボールルームダンスの組み方の原型となるものが登場している（Wilson 1816：13）²。ただし、この頃の多くは、一般には手だけつなぐ形式であり、身体の密着を前提とした組み方はまだ浸透していなかった。その後、19世紀の終わり頃には、男女が抱き合うような形の組み方が登場するのだが（Scott 1892）、現在に通じる身体の接触を伴った男女2人1組という踊りの形式は、19世紀にかけて徐々に形作られていったと言える。

ここで確認しておかなければならないのは、ナッシュの主催した舞踏会の様式についてである。ナッシュは、衛生面でも治安面でも劣悪だったバースの環境を一新するために、ロンドンの上流階級の集まりこそ手本にすべきであると考えていた。そのためにアッセンブリールームを作ったのである。ナッシュによる時間の区切りに見られるような厳格さはこの目的に合致した方針であるように思われる。しかし、踊りそのものを見てみると、現在とは異なり、依拠すべきステップの型がほとんど見られない。少なくとも、どのように動くのかについての規定は残されていない。これは何を意味するかというと、「パートナーチェンジをする」、「何時まで踊る」、「メヌエットの時に男性は女性を2人誘う」といった、外枠の規定は厳密に決められてはいたものの、「実際にどのように踊るのか」に関しては、組になった2人に任されていた部分が大きかったのである。ダンスの本質を「遊戯そのもの」と評したヨハン・ホイジンガは、19世紀以前のヨーロッパのダンスのなかでも特にラウンドダンス（輪になって踊るダンス）等においてその遊戯性が純粹に発揮される、と指摘した（Huizinga 1949=1938：164）。それに対して、近代以降のダンスからは、「舞踊に固有のものでなければならぬ遊戯性が、殆ど完全に消えさっている」（ホイジンガ 1967=1938：281）と述べている。19世紀にかけて進行した、踊り方に関する規定の厳密化を舞踊からの遊戯性の喪失と見るならば、ナッシュが主催し

た当時のダンスは、未だ遊戯性の残された「気楽な」ものだったのである。

ここで、ボールルームダンス (ballroom dance) という語について簡単に説明しておきたい。「Ball」とは、フランス語の「bal」を語源とし³、日本語では「舞踏会」と訳されることが多い。「Ball」と「Dance」は、ともに「人々が集まって踊りを踊る場」を意味する (Post 1945=1922 : 135-143)。ただし、前者が幅広い年代を含む大規模なイベントであるのに対し、後者はそれよりも規模の小さいもの、という違いがある。また、Ballは、行われる場所や服装が装飾的になる。ドレスコードがあるのもBallの特徴である。それに対し、Danceは飾り付けや衣装、飲食の提供等も簡素なものであり、Ballよりも気楽な雰囲気で行われるものを指す傾向にある。

このように、単なるダンスよりも、より公式に行われるダンスを指す場合に「Ball」という語が使用されてきた。19世紀の文献には、現在のようにballroomと一語につなげられておらず、Ball Roomやball-roomと表記されている (Cellarius 1847, Scott 1892, Wilson 1816)。つまり、現在使用されているボールルームダンス (ballroom dance) の語源は「Ball専用の部屋で行われるDance」と理解しておくのが妥当である。

1-2. ミュージックホール

19世紀から20世紀初頭にかけてのイギリスの世相を語る上で欠かすことのできない施設がある。それがミュージックホールである。19世紀のミュージックホールを研究対象とした井野瀬久美恵は、労働者が集う娯楽施設であったミュージックホールが、酒の場につきものの猥雑な雰囲気が漂うそれまでの状態から、「健全なもの」に整えられていく過程を描いている (井野瀬 1990)。

ミュージックホールとは、労働者たちが、ステージで披露される演 (だ) し物を見ながら酒を飲み、気楽に (free and easy) 過ごす娯楽施設であった。19世紀の半ばにロンドンで生まれたこの施設では、歌や踊りのほかに、

手品や寸劇、腹話術なども行われ、労働者達を中心に人気を博していた。1851年は世界初の万国博覧会がロンドンで行われた年である。時代は、イギリスの人口が農村から都市に移動し始める頃であり、増加する都市部の労働者の「受け皿」としての意味をミュージックホールは有していた。

一方で、ヴィクトリア朝における規律的、禁欲的な時代の空気の中で、猥雑なミュージックホールが産業として成立するためには、社会のために役に立つ、とはいかないまでも「ちゃんとしている (respectability)」必要があった (井野瀬 1990 : 76)。社会的認知を得るためには、ミュージックホールが「きれいな娯楽」の場になる必要があったのである (同上 : 75)。ホールの経営者達はこの要請を受け、当時存在感を増してきたミドルクラス (ジェントルマンと労働者の中間層) に向けてアピールする形で、ミュージックホールの「健全化」を進めていた。たとえば、ホールへの入場に際して、服装の乱れた者や泥酔者などの入場を禁じ、それまでは許されていた場内での飲酒や喫煙を制限するようになっていった。また、それまでは、演 (だ) し物の最中にも客席内の移動や出入りは自由に行える雰囲気があったが、これも厳しく禁じられるようになった。

客席の構造も変化した。それまでは食事や酒をとるために用意された長いテーブルを撤去し、ステージの方を向いて固定された客席を設置するようになる。客は、ステージ上の演 (だ) し物を見ることを強要される「観客」に変わったのである (同上 : 79)。飲食、飲酒、喫煙、会話、演 (だ) し物見物、歌、踊り、といった複数の行為が混在する場が「健全化」されていくことによって、各行為が分断されていくのである。

2. イギリスにおけるカップルダンスの標準化

2-1. 大英帝国ダンス教師協会 (ISTD)

20世紀において、カップルダンスの標準化を主導した組織に大英帝国ダンス教師協会 (Imperial Society of Teachers of Dancing : ISTD) がある (写真1)。1904年7月25日、200名近いダンス教師がロンドン市内



写真1 大英帝国ダンス教師協会（ISTD）本部
（2015年8月6日、ロンドン、筆者撮影）

のセシルホテルに集まり、そこでつくられたものがISTDの前身となる Imperial Society of Dance Teachers である（1925年に現在の名称に変更）。その目的は、「ダンスの技術を高め、進展させること、そして過去から引き継がれた品位と威厳をまもること」であった（ISTD 2004：7）。

創設当初、132人だった会員は、2015年現在では7,000人を数えるに至っている。現在は、すべてのダンスに関する教育、普及活動を行うという目的意識のもと、14部門にわたって活動を展開している。内訳としては、7つの演劇部門と5つのダンススポーツ部門、2つの独立部門から構成され、本稿で扱うカップルダンスは、このうちのダンススポーツ部門の「モダン・ボールルーム」と「ラテン・アメリカン」の2つに相当する。

1924年には、業界の有力誌であった *The Dancing Times*（1894年創刊）の編集長を務めていたフィリップ・リチャードソンを中心として、ボールルーム部門が創設されている。そこで目指されていたことは、「バレエのように正確な技術を整えること」（ISTD 2004：34）であった。リチャードソンはISTDの名誉会員であるとともに、後に講習会と演技を主軸に

した技術団体である Faculty of Dancing の議長も務めており（1932年）、ISTD のボールルーム部門の技術面で中心的な役割を果たした人物である。一方のラテン・アメリカン部門は、それより後の1951年にISTD内に設置されている。リチャードソンは自身の著書『イギリスのボールルームダンスの歴史』（1946年）の序文において、イギリスによるカップルダンスの標準化を次のように評価している。

イングランドは間違いなく、今日のボールルームダンスの発展において主導的な役割を果たしてきた。他の国々は確かに生の素材（イギリスが標準化を施す前のダンス）を提供してきたかもしれない。ニューヨークのダンサー達は、それらの素材の近くにいたということもあって、最も早くからそれらを試してきたかもしれない。しかし、粗雑なステップを最初に分析し、それらを秩序立ったものに変え、イギリス式のボールルームダンスの技術を全地球の5分の3の頂点に至らしめたのは、まぎれもなくイングランドの教師達なのである。

（Richardson 1946：9、傍点および（ ）内の補足は引用者による）

では、リチャードソンらがダンスの標準化に着手した当時、イギリスにはダンスに対してどのような考えがあったのだろうか。

ヴィクトリア朝時代（1837年－1901年）には、男女が組んで踊るワルツもポルカも国立のホールで踊ることが何年もの間、禁じられていた。特に聖職者達（clergy）からの批判が強く、その根底には男女の身体接触が導く秩序の動揺への恐れがあった（Wagner 1997）。当時のイギリスでは、女性のセクシュアリティは母性に限定されて理解されており、女性は性的には無知もしくは性的な欲望を有していないと考えられていた（奥田 2011:321）。男女が身体接触を伴って音楽と踊りに身を預けることが、「ない」とされていた女性のセクシュアリティを目覚めさせてしまうことへの恐れが、聖職者達による批判の背景にあったと推測できる。

ヴィクトリア朝の影響を強く引き継いだエドワード7世の時代（1901年-1910年）を経て、リチャードソン達がカップルダンスの標準化に取り組んだ頃、聖職者や道徳家以外からもダンスに対する批判が続いていた。しかし、その中で、それまでの批判とは一線を画するものが現れるようになる。それが「正しいダンス（proper dancing）」という考え方である。

ダンスに対するそれまでの批判は、ダンスそのものの反秩序性を指して行われたものであった。つまり、ダンスそのものが無作法なふるまいを助長するというものや、男女が身体接触を維持したまま踊ることが男女を制御不能な興奮状態に導くというものであった。それに対して、ケタリング（イングランド中部の都市）のある牧師（vicar）は、「使い方さえ間違えなければ良いものである」という立場を表明したという（Quarney 1924 : 32）。これは、記者であるエドモンド・カーニーが耳にした話である。この考えは、現在の我々の感覚からはさして目新しいものではないのだが、このことが驚きを持ってわざわざ記事として描かれているところに、この牧師の意見が持つ当代的な意義がある。記事では、「のめり込みすぎなければ楽しいレクリエーション、運動になる。」（同上）と条件付きでのダンスの意義を認めている。ダンスそのものではなく、ダンスの「使い方」がこれまでは問題だった、と言っているのである。しかし、ではいったい何が「正しいダンス」なのかについてはここでは触れられていない。ただ、「定義は難しい」と述べられているだけである。このように、1920年代に、「ダンスそのものが危険である」という批判を乗り越える形で登場した「正しいダンス」という考え方は、アメリカや日本においても見られた現象である⁵。

2-2. 海外からの踊りの流入

1910年代、男女が組んで踊るダンスのうち、特に厳密に規定されたダンス（オールドタイムと称され、バレエの技術を基礎としていた）のあり方に対して、若者達を中心に反発が起きていた。教師が要求する細かい規

定（動きだけではなく礼儀作法も含めて）や「上品なふるまい」を制約だと感じて反発する若者達によって「反ワルツパーティー（The anti-Waltzing Party）」と銘打った集会が開かれることもあった。若者達は「自由に自分の好きなように踊るスタイル（a free and easy go-as-you-please style）」を求めるようになったのである（Silvester 1977：15）。

イギリスにおけるカップルダンスの標準化の背景として忘れてはならないのが、アメリカからもたらされたジャズの影響である。リチャードソンによれば、第1次世界大戦の終わりにさしかかった1917年の時点では、イングランド内に駐留していたアメリカ兵を通じて、イギリス人はジャズを知ったという。アメリカではジャズに合わせて踊ることは、決まった動きの型を持たずに音楽に合わせて激しく揺れることを意味していた。この影響を受け、イギリスではベア（熊）ダンスやホース（馬）トロットといった、それまでのイギリスにはなかったダンスが流行するようになる。

また、この頃には、アメリカからより自由度の高いボストン・ワルツがイギリスにもたらされ、イギリス国内で広く普及するようになる。同じ頃、1900年代半ばからパリで流行していたアルゼンチンタンゴが、アメリカからはフォックストロットがイギリス国内にもたらされるようになる。1920年代の半ばには、このフォックストロットはテンポの遅いものと速いものに枝分かれし、前者にスローフォックストロット、後者にクイックステップという名称が付されるようになる（山崎 1999：60）。

以上の踊りは後に「ボールルームダンス」としてまとめられていく。一方で、カップルダンスのうち「ラテン・アメリカンダンス」としてまとめられるものも、この時期より少し遅れて、1930年代頃からイギリスにもたらされている⁶。このように、アメリカから持ち込まれた新しい踊りや、フランスを経由した非西洋の踊りがイギリスに流入したことを背景にして、それまでカップルダンスを教えていた教師たちは、それらの標準化に動き出すのである。

以上のように、それまでイギリスで行われてきた男女の組によるダンス

(オールドタイム) への反発と、海外からの新しいダンスの流入、そして「正しいダンス」の踊り方であれば社会的に問題も起こらないという思潮を背景に、ISTD を中心としたカップルダンスの標準化が進められていく。

2-3. カップルダンスの標準化

ISTD 内にボールルーム部門が設置された初期の代表的な教科書には次のようなものがある。ヴィクター・シルベスターによる *Theory and Technique of ballroom dancing* (1933年)、アレックス・ムーアによる *Ballroom dancing* (1936年)、*Revised Technique of ballroom dance* (1948年)、ヘンリー・ジェイクスによる *Modern ballroom dancing* (1944年)、アンソニー・ハーレーによる *Ballroom Technique* (1948年) 等である。

標準化の際に重視されていたのは、「いかにして足の移動を書くか」(写真2) という点と「いかにして身体の動きを書くか」(写真3) という点である。いずれの点においても、身体の動きを紙の上に書き表すという点に教師達の関心が集まっていた。写真2は、足型図 (foot print) と呼ばれるものであり、床に対して足の置く場所がどのように移動していくのが男女別に表されている。写真3は、タイミング、回転量、部屋に対する体の向き、床からのかかとの離れ具合など、身体の動きが項目ごとに細分化された状態で記述されている⁷。ISTD では、新たに追加されるステップごとに紙の上に記述していくことを行い、その一方で、記述方式そのものを洗練させていくことを目指していた。この2点に留意したダンスの記述方式は、基本的には現在にも引き継がれている。

また、アレックス・ムーアによる「マンスリー・レターサービス (Monthly Letter Service:MLS)」も挙げておきたい。アレックス・ムーア (1901-1991) は、1947年から1967年まで ISTD のボールルーム部門のチェアマンを務め、カップルダンスの標準化を牽引した人物である。彼は、自身の教科書執筆や改訂作業のほか、ダンス教師達へ広く今日の技術的課題等を周知すべく「通信教育」も行っていた。そのうちのひとつが MLS である。これ

は世界のダンス教師達に向けて発信されていたが、とりわけ日本の教師に積極的に受け入れられている。東京のダンス教師による技術研究団体「モダン・ウォルサーズ」は、MLS が創刊された1933年から取り寄せ、研究の重要な資料として活用してきた。購読は戦間期に一時途絶えたが、戦後、東京の教師達はイギリス大使館に援助を求めて、再度の購読および正式な翻訳出版権を取り付けている。MLS には、技術面での最新情報や、ステップの中で間違えやすい部分についての注意喚起のほか、ムーアが見聞したヨーロッパ各国のダンス事情や競技会の結果等が掲載されていた。ムーアは他にも「ワットゥティーチ (What to Teach)」という、教師向けのより専門的なサービスも行っていた。ここには、教師が生徒に教える際に参考になるように、個別のステップを順番に組み合わせたもの(アマルガメーション)の例が種目ごとに細かく記述されている。教師達は、これを見て、特定の順番に固定されたステップを生徒に教える時に役立てたのである。

音楽に関しても標準化は行われている。ISTD の創設メンバーであり、バンドマンでもあったヴィクター・シルベスターは、1935年にカップルダンス用の音楽として標準テンポの確定を行っている。これ以降、競技会で演奏される曲は標準テンポに即したものに変わっていくことになる。先述の MLS には、標準テンポを守れていないバンドに対する苦言が呈される場面も登場する (MLS、1959年7月号)。このように、音楽のテンポや身体の動きをいくつもの部分に分割して記述することを通して、より多くの人々にカップルダンスの「マニュアル」を届けることが目指されたのである⁸。

この点は、フランスの事情と比較すると興味深い。フランスのカップルダンスの最大の特徴は「即興性」にあると言われる。それに対して、動きのルールをあらかじめ記述し、それを優先するイギリスの方法は即興の対極にある。このような、カップルダンスをめぐるイギリスとフランスの「闘争」(サビリヤーノ 1995: 295)⁹ は、かつて日本でも盛んに議論されていた時期がある (1930年代)。しかし、「限られたメンバーに秘伝的に教えら

れる踏風」(永井 1991 : 124) を是とするフランス式よりも、体系化された技術に裏付けられたイギリス式の方が、一般には受け入れられるようになり、ほどなくして日本はイギリス式のカップルダンスを主流に位置付けるようになった。

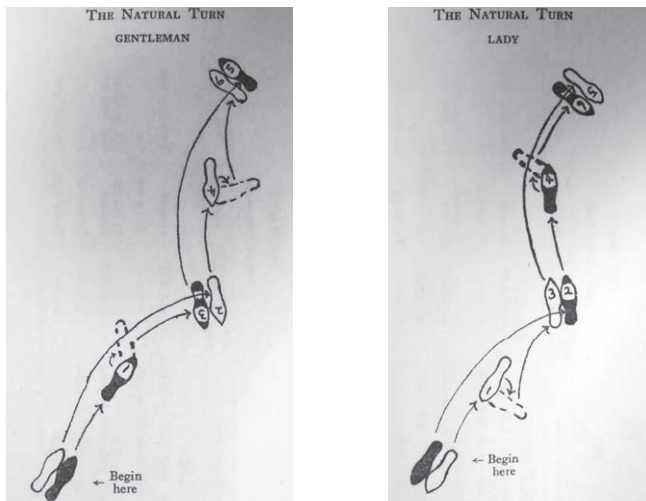


写真2 標準化されたカップルダンスの足型図

※ (Silvester 1933 : 93、95) より。左は男性用、右が女性用。

Further copies of these novel, informative and concise dance charts, printed on stout paper, can be obtained from the Secretary, I.S.T.D. Please state whether Waltz or Slow Foxtrot is desired.

Price 6d. per chart post free.

The Quickstep and Tango will be published in the June issue of the *Dance Journal*.

Supplement to the *Dance Journal*, March, 1936.

DANCE CHARTS
COPYRIGHTED BY
Victor Silvester

Abbreviations used:
S. = A slow step (1 beat).
Q. = A quick step (1 beat).
R.F. = Right foot.
L.F. = Left foot.
R. = Right. P.P. = Promenade position.
L. = Left. L.O.D. = Line of Dance.
C.B.M. = Contrary body movement position.
C.B.M.P. = Contrary body movement position.

SLOW FOXTROT

NAME OF FIGURE	NO. OF STEPS	SLOWS AND QUICKS	NO. OF PASSES	CONTRARY BODY MOVEMENT	BOY'S SWAYS (GENTLEMAN—LADY CONTRA.)	THE END FALL	AMOUNT OF TURN	ALIGNMENT (GENTLEMAN—LADY CONTRA.)	REMARKS
WALK	1	S.	1	NB.	NB.	NB.	NB.	Facing L.O.D.	—
THREE-STEP	3	Q.Q.S.	1	3.	—	Five at end of 1 Lower 2	—	—	—
FEATHER STEP	4	S.Q.Q.S.	1½	1, 4. (C.B.M.P. on 3.)	To the R. on 2, 3. To the L. on 3, holding it and straightening as weight goes on to 6.	Five at end of 1 Lower 3	—	Begin and finish facing L.O.D., or Begin and finish facing diag. to centre.	—
NATURAL TURN	6	S.Q.Q.S.S.	2½	1, 3, 5.	To the R. on 2, 3. To the L. on 3, holding it and straightening as weight goes on to 6.	Five at end of 2 Lower 3	Just over ½ of a turn to the R. on the complete figure.	Begin facing L.O.D. Take 1 back into L.O.D. Finish facing diag. to centre.	Feet should be parallel on 2, having made a ½ of a turn. (Lady—heel turn). On Nos. 4, 5 the man makes a heel turn—it is known as a Heel Pull.

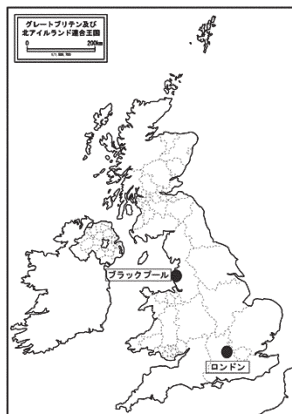
写真3 ボールルームダンスの「チャート」例 (1936年)

※ (ISTD 2004 : 53) より。

3. 標準化のその後の展開と日本

では、ISTD を中心として、カップルダンスの標準化はその後どのような展開を見せるのだろうか。そこには大きく2つの側面を指摘できる。

1 点目は、競技会の重視である。ここには、競技会を通して技術水準の向上を図り、一般への「正しいダンス」の普及、教育活動を展開していくねらいが込められている。なかでもカップルダンスの世界的なイベントとなったのが、ブラックプール・ダンスフェスティバルである。1920年に開始されたこの競技会は、イングランド北西部のブラックプールに拠点を置く（右図）。毎年、5月の下旬から6月の月上旬にかけて、ウインターガーデンのエンプレス・ボールルームをメイン会場に行われる。当初は、現在の分類による競技会ではなかったが、ボールルーム部門は1931年から開始され、ラテン・アメリカン部門は1961年から競技化されている¹⁰。



個々の組によって踊られる競技会以外に、国別の「団体戦」もある。最初は、イギリスとドイツだけで行われていたが、現在は、日本、アメリカ、オーストラリア、ロシア、イタリア、スカンジナビア諸国も参加し、フェスティバルの目玉になっている。イギリスで開催される世界的な競技会は他にもあるが、この大会が最も歴史が古く、世界的な認知度も高い。イギリスのカップルダンスと日本との関係は出場する競技選手の数にも表れている。表1は、2015年に開催された競技会の出場選手の出身国上位10か国（地域）を表したものである。ここから分かるように、日本からの出場選手がボールルーム、ラテン・アメリカン両部門とも群を抜いて多くなっている。この傾向はここ20年ほど変わらない。この事実を表れているのは、日本は競技会を主軸とするイギリスのカップルダンスを、世界で最も積極的に取り入れた国であるということである。

2点目は、メディアを通した上演作品化である。1949年に放送を開始した「カム・ダンシング (Come Dancing)」というテレビプログラムがある。イギリス放送協会 (BBC) によって制作され、イギリス国内の地域のダンス教室に番組が依頼したプロダンサーが教えに行き、その様子を放映するという内容であった。1953年からは番組が競技会を主催・放映するという内容に変更され、1998年の放送終了までこの内容は継続された。終了後、2004年からは有名人を巻きこんだ「ストリクトリー・カム・ダンシング (Strictly Come Dancing)」(BBC) として再開されている。子どもというよりも大人の間で人気を博し、現在でもイギリス国内では人気である。この反響はイギリス国外でも大きく、翌年の2005年にはアメリカでも同様の番組「ダンシング・ウィズ・ザ・スターズ (Dancing With the Stars)」が開始されている。内容はほぼ同じで、有名人やスポーツ選手が短期間でカップルダンスの訓練を受け、プロダンサーを相手に5分ほどのショーダンスを披露するというものである。

表1 2015年ブラックプール・ダンスフェスティバルへの出身国(地域)別出場組数

出場組数			出場組数		
1	日本	77	1	日本	90
2	アメリカ	24	2	アメリカ	19
3	台湾	23	3	台湾	17
4	韓国	16	4	中国	16
5	ロシア	13	5	ロシア	15
5	中国	13	6	香港	13
7	イングランド	12	7	イングランド	12
7	イタリア	12	7	韓国	12
9	ドイツ	10	9	ドイツ	7
10	カナダ	9	10	イタリア	6
	(その他)	43	10	ポーランド	6
	計	252		(その他)	24
				計	237

※1 Blackpool Dance Festival 公式ホームページより筆者作成。

(<http://www.blackpooldancefestival.com/> 2015年11月11日アクセス。)

※2 左は「プロフェッショナル ラテン・アメリカン部門」、右は「プロフェッショナル ボールルーム部門」。

そして、数組の参加者達による競技形式のもと、各シーズンの優勝者を決定する。日本でもその内容を参考にしたテレビ番組が日本テレビによって放送された¹²。このようにショー的要素を前面に出したプログラムがメディアから発信されることで、カップルダンスは上演作品としての性格を強めていく。つまり、人の目を気にして踊ることが、踊る上での最優先事項になるということであり、観客の目やカメラがなければ、決してしないようなポーズや表情をとるようになることを意味する。

以上に見てきたように、イギリスは、教師協会を中心として様々な国や地域からもたらされた個別のダンスを標準化し、それらをボールルームダンス、もしくはラテン・アメリカンダンスとして、日本を含む世界へと「輸出」するようになったのである。

参考文献

- 井野瀬久美恵 (1990) 『大英帝国はミュージック・ホールから』 朝日新聞社。
- 奥田伸子 (2011) 「ジェンダーの二十世紀」、『近代イギリスの歴史－16世紀から現代まで』 木畑洋一、秋田茂編著、ミネルヴァ書房、第14章。
- 小林章夫 (1989) 『地上楽園バース リゾート都市の誕生』 岩波書店。
- サヴィリヤーノ、E、M (1995) 「日本におけるタンゴと情熱をめぐる世界経済」、『文化加工装置ニッポン：「リ＝メイド・イン・ジャパン」とは何か』、ジョーゼフ・J・トービン編著、武田徹訳、時事通信社、第11章。
- 永井良和 (1991) 『社交ダンスと日本人』 晶文堂。
- 山崎剛二 (1999) 『社交ダンスへの招待』 ダンスマガジン編、新書館。
- Bosse, Joanna (2008) Salsa Dance and the Transformation of Style: An Ethnographic Study of Movement and Meaning in a Cross-Cultural Context, In *Dance Research Journal*, 40(1), pp.45-64.
- Cellarius, Henri (1847) *Fashionable Dancing*, London : Vizetelly Brothers and Co.

- Huizinga, Johan (1949=1938) *Homo Ludens: A Study of the Play-Element in Culture*, London: Routledge & Kegan Paul (ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス＜人類文化と遊戯＞』中央公論社、高橋英夫訳、1967年)
- ISTD (2004) *100 years of Dance: A history of the ISTD Dance Examinations Board*, Imperial Society of Teachers of Dancing.
- Mcmains, Juliet (2006) *Glamour Addiction : Inside the American Ballroom Dance Industry*, Wesleyan University Press.
- O'Neill, Rosetta (1978) 'The Dodworth Family and Ballroom Dancing in New York', *Chronicles of the American Dance: From the Shakers to Martha Graham*, Paul Magriel (ed.), Da Capo Press, pp.81-100.
- Post, Emily (1945=1922) *Etiquette: The blue book of social usage*, Frank & Wagnalls.
- Quarny, Edmund (1924) 'Proper Dancing', In *The Ballroom*, 5(11), W.F. Hurndall, p.31.
- Richardson, J.S. Philip (1946) *A History of English Ballroom Dancing, (1910-45): The Story of the Development of the Modern English Style*, London: Herbert Jenkins.
- (1960) *The Social Dances of the 19th century in England*, London: Herbert Jenkins.
- Schneider, Gretchen (1998) 'Social Dance', In *International Encyclopedia of Dance*; Oxford, pp.619-636.
- Scott, Edward (1892) *Dancing as an Art and Pastime*, Richard Clay and Sons : London and Rugby.
- Silvester, Victor (1933) *Theory and Technique of Ballroom Dancing*, Herbert Jenkins: London.
- (1977) *Modern ballroom dancing: history and practice*, Barrie and

Jenkins: London.

Wagner, Ann, Louise (1997) *Adversaries of dance : from the Puritans to the present*, Urbana: University of Illinois Press.

Wilson, T (1816) *A Companion to the Ball Room*, London: Sherwood, Neely and Jones.

注

-
- 1 バース (Bath) は現在、世界的に有名な観光地であり、1987年には「バース市街」
としてユネスコの世界文化遺産に登録されている。
 - 2 ナポレオン戦争の戦後処理を意図したウィーン会議 (1814年－1815年) で行わ
れた舞踏会で、男女が抱き合って組むワルツが踊られた (山崎 1999 : 68)。
 - 3 語源はラテン語で「踊る」を意味する ballare である。類語には、ballet (バレエ)
や ballad (バラード) がある。
 - 4 7つの演劇部門は「チェケッティ・クラシックバレエ」、「ギリシャ古典劇」、「イ
ンド古典舞踊」、「大英帝国クラシックバレエ」、「現代劇」、「国民舞踊」、「タップ
ダンス」、5つのダンススポーツ部門は「クラブダンス」、「ディスコ・フリース
タイル・ロックンロール」、「ラテン・アメリカン」、「モダンボールルーム」、「シー
クエンス」で構成されている。2つの独立部門には「ナチュラル・ムーブメント・
グループ」と「ダンス研究委員会」がある。
 - 5 この頃、アメリカでも「反ダンス」の社会的認識に対抗する形で、proper
dancing の考え方が登場している (McMains 2006, O'Neill 1978)
 - 6 スペインに起源を持つ「パソ・ドブレ」もこの頃からパリを経由してイギリス
に入っている。他にも同時期には、ニューヨークやベルリン、東京にも紹介され
ている。
 - 7 アメリカにおけるボールルームダンスの指導方法について指摘したボッセによ
れば、ボールルームダンスの指導が陥りうる限界は、中心となる動きとそれに次
ぐ動きとの関係を説明できないという点であるという (Bosse 2008:54)。つまり、
ダンスの動きを、それを構成する各部分に分割することによって、各部分がどの
ように関係しているのかが見えづらくなるのである。
 - 8 ダンスのマニュアル化は、教師個人個人が有していた「商売上の秘密 (trade
secrets)」に対する一般の人々のアクセスを可能にした。同時に、この頃から
教師たちは、自分たちの提供するダンスが、道徳的かつ身体運動としても優れ、
芸術的価値も備えているということを強調し始めるようになった (Schneider
1998 : 626)。

-
- 9 日本におけるタンゴの実践を研究対象としたマルタ・サビリャーノは、フランス風のタンゴを「貴族階級向けの手作り品的な贅沢なもの」、イギリス風タンゴを「中流階級向けの品質管理された大量生産的なもの」と評している(サビリャーノ 1995 : 301)。
- 10 賞金は決して高くない。プロフェッショナル部門であっても、優勝賞金はわずか280ポンド(約56,000円、2015年12月1日現在)である。
- 11 興味深いことだが、先進主要国のなかで、フランスからの出場者が両部門ともいないという点である。カップルダンスをめぐるイギリス対フランスの「闘争」はここにも表れている。
- 12 「シャル・ウィ・ダンス? ～オールスター社交ダンス選手権～」という番組名で、2006年4月8日から2007年3月17日まで放送された。